

SHOW HEYシネマルーム

★★★

チェンジングレイン

2002 (平成14) 年11月24日鑑賞

Data

監督：ロジャー・ミッチェル

出演：ベン・アフレック／サミュエル・

ル・L・ジャクソン／キム・

スタウトン／トニ・コレツ

ト／シドニー・ポラック

👁️👁️ みどころ

強引な車線変更は交通事故のもと。免許証をもらう時私たちはこう教えられた。若き弁護士ギャビンとさえない中年男ドイルは共に裁判所に向かう途中で接触事故！自分の強引な車線変更が原因で事故をおこしながら、時間を惜しむギャビン。そこからトラブルが発生し、二人の人生を変えてしまう展開に……。対照的な2人の人物を主役として人生の機微がうまく描かれている。しかし結論には不満あり……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<主人公の一人は若手弁護士>

主人公ギャビン・バネック（ベン・アフレック）は29才の弁護士。まだ若い、妻の父が経営する大法律事務所のれっきとしたパートナー弁護士だ。彼が今担当しているのは、サイモン・ダンの遺言検定の事件。つまりサイモン・ダンの遺言が真正のものと検定されれば、サイモン・ダン財団の資産運用が妻の父の法律事務所に任せられ莫大な収入が得られるという重大な事件。

今日は法廷に行き、本人のサインのあるファイルを遺言検定の証拠として提出すれば訴訟は「勝ち」、そう踏んだギャビンは、朝の渋滞するニューヨーク・マンハッタンのハイウェイを裁判所に向かって車で急いでいた。車はもちろんベンツだ。

<もう一人の主人公はさえない中年男>

ドイル・ギブソン（サミュエル・L・ジャクソン）は、アルコール依存症の中年男。今は妻と別居し、離婚と子供の親権をめぐる争っている最中だ。妻はドイルと離婚し、二人の子供を引き取ってオレゴンへ逃げ出そうとしていた。しかしドイルはマンハッタンに

妻や子供のための小さなアパートを買うべく、ローンの段取りを完了させ、もう一度人生をやり直す体制を整えていた。そして今日の法廷でアパート購入の契約書等をすべて提出しそれを心から訴えれば、家族の絆は復活し、やり直せるものと確信して、彼も渋滞する朝のハイウェイを裁判所に向かって走っていた。

<交通事故の発生—悪いのは明らかにギャビン>

そんな二人が朝のハイウェイを隣り合って進んでいた。先を急ぐギャビンは強引に車線変更。そのためギャビンの車とドイルの車は接触。ドイルは「5分でケリがつく。示談の処理を！」と主張したが、ギャビンは、「ああ、今日はずいてない！」と嘆きながら、「とにかく先を急いでいる。白紙の小切手を渡すからそれで処理してくれ！」と一方的に言って現場を立ち去った。ドイルは呆然とこれを見送るだけだった。しかし、ギャビンが立ち去った事故現場には、ギャビンが今日の法廷に提出すべきサイモン・ダンの署名入りの「オレンジ色のファイル」が落ちていた。特に意味もなくドイルはそれを拾い、一路裁判所へと急いだ。

<二人とも大チョンボ>

法廷に何とか間に合ったギャビンは意気揚々と自説を展開。そしてファイルを提出・・・しようとしたが、何とそれがない！慌てるギャビン。しかし、ないものはない。「しまった！あの事故現場で小切手にサインをした際、下敷きに使ったファイルをあの場に落とした・・・」。

相手方の好意と、裁判長の臨機応変の処置によって、ファイルの提出は1日だけ猶予された。しかし、もし提出できなければ・・・。ギャビンには、弁護士のクビを懸けた大問題となってしまうのだ。

他方ドイルは・・・。こちらは審理に20分も遅刻してしまった。アメリカの法廷はいつも満杯で順番待ち。そんな中、20分の遅刻は大きい。審理は既に終了し、子供の親権は母親に決定され、関係者は帰り支度だった。

ドイルは、「家族のためにアパートを買った。今日は思いもかけない交通事故に遭ったんだ」と訴えたが、日本ならいざ知らず、アメリカ社会ではこれは通用しない。

2人の主人公は共に最悪の一日のスタートとなってしまった。そしてギャビンの車線変更(チェンジングレーン)から生まれた1つの交通事故は、単なる事故処理の問題をこえ、二人の人生を変えるかもしれない大問題にまで発展していくことになってしまったのだ。

<わりとしつこい二人>

「ファイルを取り戻さなければ・・・」とあせるギャビン。彼は割と素直で真面目タイ

プの優秀な弁護士だが、同僚の不倫相手ミシェル（トニ・コレット）がいた。ミシェルに泣きついた(?) ギャビンにミシェルは、ハッカーで「裏道」に通じたプロ、フィンチ（ディラン・ベイカー）を紹介した。そこでやむなくギャビンはフィンチに依頼。弁護士も自分の問題になれば弱いものだ・・・。

ハッカーのフィンチはたちまちドイルの個人データに到達。ローンの決定が下ったばかりのドイルの個人預金をストップさせると脅してファイルを取り戻そうとした。

今日のイライラを何とかおさえ、つい踏みはずそうとした禁酒も守り、そして自分の良心に問いかけて、ファイルを返そうと決意したばかりのドイルに、この脅しが伝わったから大変。

ドイルの反撃（復讐）が始まった。「お前の人生を台無しにしてやる！」というものだ。

この「復讐物語」は脚本でつくるものだから、いくらでもエスカレートできる。家族への脅迫からあわや殺人罪というところまでエスカレートしていくすごいものだ。サミュエル・L・ジャクソンは、この嫌がらせの行動が実によく似合う名演技だが、ベン・アフレックはさすがにちょっと無理がある。あまりに善良すぎ、ハンサムすぎて、悪ぶってもすぐに「化けの皮」がはげてくるというものだ。

<弁護士の良心は?>

実は、ギャビンの義理の父親はかなりのワルの弁護士だった。映画の途中でそれがわかる。大きな富と社会的名誉には大きなウラがあったのだ。日本の弁護士と違って、アメリカの弁護士にはワルが多い・・・(?)、それはともかく、この事件を契機としてギャビンにも義理の父親のウラの面が露呈されたのだ。

そこでギャビンは、これを告発して我が道を行くのか、それともパートナー弁護士として従来の道に戻ってしまうのか、が問われることになった。しかし・・・。どうもここらで、この映画ではスッキリしない。それが大いに不満だ。ベン・アフレックというカッコいい俳優を使う以上、スカッと「正義の味方」、「月光仮面」の若手弁護士に徹してもらいたかったが・・・。

<中年男の家族は?>

他方ドイルは?最終的にファイルはドイルの意思によって任意に返還された。しかし、返還された時点ではもはやこのファイルは何の意味もないものになっていた（そのカラクリは映画を観てのお楽しみ）。

そしてこちらも、家族4人が再出発を誓うところで映画は終了した。しかしこれに本当に家族の絆は復活したのだろうか。疑問なしとしない。

<総合評価は?>

この作品のパンフレットには、「今年、全米のマスコミが最も賞賛した作品」とあり、数々の賞賛の言葉が並べられている。私も大いに期待を持って観に行った。とくにベン・アフレック扮する若き弁護士が「チェンジングレーン」によって交通事故を発生させた後、どんなトラブルに巻き込まれ、それをどのように乗り切っていくのかについては大いに興味を持っていた。しかし・・・。

映画のストーリーはそれなりによく練られた面白いもの。またドイルを演じるサミュエル・L・ジャクソンの演技はさすがと思えるもの。したがって決して「B級映画」ではなく、それなりに人生を考えさせる作品に仕上がっている。しかし、十分満足できる「完成品」とはいえないだろう。それは、やはり最後のまとめ方の不満だ。私には何となくモヤモヤしたものが残り、納得できないエンディングだと言わざるを得ない。

2002（平成14）年11月25日記